
あなたが好きで...

mitsuko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたが好きで…

【Nコード】

N6115T

【作者名】

mitsuko

【あらすじ】

付き合い始めて、もう1年が過ぎた。優奈^{ゆづな}は、気まぐれに辰巳^{たつみ}を呼び出しては、帰らせる。何も言わずにその言葉に従う辰巳。いけないとわかっていても優奈はまた辰巳を呼ぶ。そんな関係に変化が訪れたのは、山が紅く染まり始めた秋のことです…

ブログ

『ねえ、今から来て…』

『ああ』

『ねえ、もう帰って』

『…ああ』

『ねえ、やっぱり来てよ』

『…わかった』

ねえ、私のこと、好きなんでしょ？
だったら、私の言うことを聞いて。
難しいことなんて言ってない。

ただ、私に会いに来て…
そして、帰るの。
それだけのことなの…

あなたは私に会えるし
私はあなたに会える。

ねえ、こんなにいいことなんてないでしょ…？

今日も私はあなたを呼ぶ。

あなたは何も言わずに私のもとにやってきて…そして、帰っていく。

ねえ、あなたが好き…

わたしたちの関係は… 1

「ねえ、今日って何の日？」

私は手元のファッション誌から、顔も上げずに尋ねた。

ん、と短い声を上げて隣に座る彼が背後にある壁掛けのカレンダーを確認する気配がする。

——別に私は今日が何日かなんて聞いているわけじゃないのに…

「今日は九月一三日。普通の休日だけど」

低く、そっけない言い方。それだけ言うと彼のほうもまた手元の雑誌に戻る。

「あつそ…」

私の返事もそっけないものになってしまった。

静かな部屋にはページをめくる音だけが響く。

私はページをめくりながらも、内容なんて少しも頭に入ってなんかいなかった。

——今日は付き合って1年なのに…

パタン——

思い切りよく雑誌を閉じた私に驚いたのか、辰巳^{たつみ}は雑誌から顔を上げて私を見た。

私はもちろん、彼の方なんか見ていない。

視線を合わせないように前を見て言う。

「今日はもう、帰って」

いつもの私のセリフだ。

「…ああ」

辰巳は文句ひとつ言わなかった。

これもいつも通り。

辰巳は雑誌を閉じると持ってきた鞆に入れる。

そのまますくつと立ち上がると、玄関へ向かった。

私もその後に行く。

…それは不意打ちだった

「ああ、そういえば」

そういつて自分の鞆をあさりだす辰巳。

出てきたのは、黄色いリボンに包まれたもの。

掌にそつと乗せられたそれは…

「これ!!」

そこでやつと辰巳の顔を見た。

「今日…一年目だから」

それだけ言つと辰巳は呆然とする私の額にそつと唇を落とした。

声も出せずに黙りこくる私に、じゃあと言って辰巳は玄関を出て行った。

——覚えてたんだ

そう思うと同時にまた、いつもの罪悪感が顔をのぞかせる。

辰巳はこんな私のどこがいいんだろうか。

黄色いリボンに手をかける。

そつと包みを広げると、一か月前にデートで見かけたイヤリングだった。

欲しいなんて、言ってなかった。

いいとは思つたけれど、手持ちのお金がなくてあきらめた品だ。

「…ばか」

つい口からこぼれた言葉は、誰もいない玄関に響いた。

わたしたちの関係は… 1（後書き）

はじめての投稿作品です。

慣れていないので変に思う点も多々あるとは思いますが、温かい目で見てやってください。

頑張ってこれからも書いていこうと思っています。

よろしく願います!!

わたしたちの関係は…2

私が辰巳と出会ったのは去年の春。

大学に進学して、新しく知り合った友達からの紹介だった。

「…ちわ」

——無愛想な人

初対面なのに愛想笑いの一つもない。

でも、私はそんな彼のことが気になってしかたなかった。

見た目はいい方だと思う。

背は高いし、顔のパーツも整っている。

ただ、私が気になったのは、そんな見た目の良し悪しじゃない。

惹かれたのは、彼のその瞳だった。

切れ長の目にあって、強い意志を秘めたようなブラウンの瞳。

私にはないもの。

私はじっとその瞳を見つめていた。

すると、彼の方もしつかりと私を見つめていたことに気が付いた。

急に顔の温度が高くなる。と同時にもつと彼の瞳に映りたい、と思った。

その日からしばらくして、彼の方から連絡をもらった。

最初のデートともいうべき日、私は自分が持っていた服の中で一番かわいいと思うものを着ていった。

彼はやっぱり無愛想なままで。

でも、優しい…

私は、無愛想な彼の分までよく笑った。

笑うと、彼が私を、その瞳に映してくれたから。

その次は私から…さらにその次は彼から…。

そうやって会う回数を重ねていった。

そして、一年前の今日。

『付き合わないか…』

べつに誰かと付き合うこと自体は、初めてじゃなかった。

でも、私は嬉しくて、かなり舞い上がっていた。

友達は「今さら」と言っ、て、さんざん私をからかった。

でも、そんなことは気にならないくらい嬉しくて、でも…

『あいつ、それなりにもてるんだから、奪われないように頑張りな』
軽いノリで言っただつもりだったのだろうその言葉。

それは私を一瞬で夢から引き戻した。

不安が私の心を覆った。

だって、私は自分のことが嫌い。

彼が私のどこを好きになってくれたのかなんてまったくわからない。

それから数日後。

『……ねえ、今から来て』

不安に耐えきれなかった。

来てくれると信じて。

私は彼を呼び出した。

わたしたちの関係は…3

誰もいない部屋に、私の足音だけが響く。

私は部屋の隅に置かれた棚の、いちばん上の引き出しを開けた。

「また…か」

——また、渡せなかった…

どんどん埋まっていくそのスペースが悲しい。

一年たった今日。

区切りの日にしようと決めていた。

——でも、ダメだね

結局私は、私の都合で、彼を呼び出して、帰らせる。

こんなに弱い自分が嫌になる。

嫌になると、不安になる。

不安になると、また、彼を呼び出して。

また、自分が嫌いになる。

きつとこのまま永遠にこんなことを繰り返すんだ。

彼の気持ち^{こころ}が離れるまで。

ぼたりと雫^{しずく}が零れた。

勢いよく引き出しを閉めると、ソファア-の上の携帯を手を取った。

外はまだ夏の暑さが、残っている。

一年前から変わらず、ずっと、私は彼に依存している。

変わり始めた秋の… 1

一か月が経った。

肌寒い日が続いている。

同じ大学とはいえ、学部が違う私たちは日中にそうそう会う機会もなく、私の呼び出し回数は増していくばかり。

「はぁー」

ため息ばかりが出る。

辰巳は相変わらず何も言わない。

ただ、「わかった」しか言わない。

呼び出すたびに思う。

ああ、きつとまた嫌われた…

それでも呼び続けるのは、呼び出すたびに来てくれることで、まだ辰巳は私のことを好きでいてくれるんだ、と実感するからで。

「…どうした？」

後から優しく包み込むように私の身体からだに腕をまわす。

温かい。

この温もりが、彼がまだ私を好きだと教えてくれる。

「なんでもない…」

そう言って振り返ると、降ってくるキス。

「……んっ」

その口づけは、私を安心させるように深く繰り返される。

大丈夫、まだ、だいじょうぶ

ねえ、私のこと…好き？

「もう、帰って」

また、前触れのないセリフ。

「…ああ」

辰巳はやっぱり何も言わずに玄関へ向かう。

後に残きながら、その背中をじっと見つめる。

大きな背中。

その背中を見るのはもう何度目かな…

引き留めたい気持ちをぐっところえる。

ダメ…ここで引き止めたら帰す意味がなくなっちゃう

辰巳がずっとドアノブに手をかける。

あと少し…

——ドアが閉まる直前

「…はあー」

本当に小さなそれは、でも確かに聞き間違えなんかじゃなくて…

「…う、そ？」

初めて聞いた、辰巳のため息。

それは、変化が訪れる前の、小さな、小さな前触れ——

変わり始めた秋の… 1（後書き）

テストのおかげで、しばらく放置が続いてしまいました。

スミマセンでした（・・・；）

久々の更新に緊張してます。

まだまだ、いたらないヤツですがよろしく願いますm（――）

m

変わり始めた秋の…2

結局その日は、再び呼び出すことなんてできなかった。

でも、次の日から私の辰巳への呼び出しは再開。

辰巳は以前と変わる様子を見せない。

呼び出されると、いつでも来るし、帰れと言えば帰る。

あのため息は、私が気にし過ぎているだけなのかもしれない。

…ただ、疲れていただけかもしれない。

やっとそう思い始めた、二週間後の今日。

「お、は、よっ」

どすつと、頭上の重みと共に、聞き慣れた声がする。

「雅美…^{まさみ}重いよ」

私は、さっと雅美を振り落とす。

「わあ、素っ気ない」

大して気にしていないくせに「ヒドイッ」と私を責める雅美。

泣き真似まで入ったそれは、いつもよりオーバーだ。

少しだけ、嫌な予感がした。

こんな日の雅美が言い出すことで、良かったことなんてあった試しがない。

「あのさ…」

ケロッと態度を変えた雅美は、私の隣の席に着く。

すると、私の方を向いて、何か言いたそうな、でも言いにくそうに私を見つめた。

「最近っ——」

「それでは、講義を始めます」

意を決した雅美の台詞は、いつの間にか現れた講師の登場に遮られた。

「…どうしたの？」

小声で続きを促すと、やっぱり言いにくそうに「あとで…」とだけ言って、講義に集中し始めた。

いつもは講義なんて聞かないくせに…

結局、講義の後も何だかんだで慌ただしく、雅美の話はうやむやになっちゃった。

そして、私が雅美の言いたかったことを知ったのは翌日。

「え……？」

目の前の彼女は、心底心配そうに……でも目は嬉しそうに、私に話を聞かせた。

「だから、辰巳くん。この間、年下の女の子連れて歩いてたって！
目の前が真っ暗になった。

呆然とする私を見て、目の色を濃くした彼女は、私にさらに追い討ちをかける。

「なんか、かなりイイ雰囲気だったらしいよ。腕まで組んで……っほら！写真」

本体が分からないほど装飾された携帯が目の前に突き出される。

「……っ！？」

その画面にいるのは紛れもなく辰巳で、そして……

「これ、回ってきたんだ。知ってる子？」

「……………」

投げかけられた問いに、首を左右に振ることしかできなかった。

高校生だと思われる女の子は、嬉しそうに……恋する瞳で、彼を見上

げていた。

「ま、元気だしなよ！次の彼氏くらいすぐに見つかるって！！」

そう、元気に言っ去っていく彼女。

まるで、私たちが別れることが決まっているみたいな言い方。

でも…

絶望に押し潰されそうなか、私を取り出したのは携帯。

手元を見ることもなく、相手の番号に繋いだ。

トゥルルル…トゥルルル…

数回のコールの後、辰巳のいつもと変わらない声がする。

「どうした？」

いつもとは違う時間帯の電話に、辰巳はどう思ったんだろうか。

心配した？

それともウザい？もう、私となんか別れたい？

「…おい、どうかしたのか？」

でもね…

「ねえ、今すぐ私のところに来て」

——
別れないから

変わり始めた秋の… 3

それから10分。

ようやく辰巳の姿が目に入った。

少しだけ息が上がっている。

その様子が、まだ私を嫌いではないのだと、告げている。

そう思った。

「…、どうした？」

そう尋ねる瞳には、心配の色が滲んでいる。

私は何も言わず、ほんの少しだけ、傍目にはわからない程度に、震える指で、彼のシャツを掴むと、その胸に身体を寄せた。

温かい体温に包まれ、心に、大丈夫だと暗示をかける。

まだ、別れない…

安堵に、力の抜ける私の身体に、そっと辰巳の腕が回った。

「大丈夫か？」

深くて、私を落ち着かせる声。

「…デート、したい」

私は、自分の要求だけを、突きつける。

「…いいよ」

確か、今日は2人とも、もう授業は残っていなかったはず。

「どこに行く?」

「どこでも。2人でいられるところなら」

本当に、ワガママな私は、どこまで、辰巳を縛り付ければ、気が済むのだろう。

「じゃあ、お前の部屋に行こう」

私が素直に頷くと同時に、辰巳は私の肩を抱いて、歩き始めた。

私は…私たちは、どこへ向かいたいのか。

私たちは、棘のついた鎖に、傷つけられることに、慣れてしまった。

鎖など、血で錆びてしまっても、気づかずに。

そして、その鎖が、すでに脆く変化してしまったとも、気づかずに。

鎖が朽ちるまで、あと僅か…

変わり始めた秋の… 4

学校帰りの学生で混雑した電車内。

その中で、私たちは、一言も発することはない。

私は、それでも良かった。

電車が揺れるタイミングに合わせて、辰巳にもたれかかる。

辰巳は、そんな私を…、私だけを見つめている。

周りの喧騒なんて、聞こえない。

まるで、私たち、2人だけの世界。

そう思うと、心は満たされた。

『まもなく、〇〇駅です…』

車内のアナウンスが耳に届く。

目的地だ。

私は、名残惜しげに、そっと距離を置くと、辰巳と並んで、出口となるドアに向かった。

人の流れに乗って、改札を出ると、急に、寒さを感じた。

繋がれた右手に、自然と力が入る。

それを感じ取ってか、辰巳の手にも、力が入った。

「寒い？」

「…ちょっとだけ」

でも、

「…温かい」

呟くように言った、私の言葉は、辰巳には届いていなかったようで、辰巳はそのまま、駅の外へと歩を進める。

気づいてくれてもいいのに、と自分勝手に、訳の分からないことを思い、そこで、ちょっとした意地悪を思いついた。

人の間をすり抜けて、半歩前を歩く辰巳の大きな背中。

振り向きそうな様子はない。

今だ！

私は、何の前触れもなく、パタリと足を止めた。

ぐっと手を引かれた辰巳は、驚いたように私を振り返る。

そんな想像をしていた。

けれど、伸びた自分の腕の先に、さっきまで感じていた、温もりはない。

きつく握りあっていたはずの手は、呆気なく離れていつてしまった。

「えっ」

手を離そうとか、そんなことは少しも考えてなんかいなかった。

それに…

「た、辰巳っ！」

離れていった温もりの主は、まるで気づくことなく、先へ、先へと進んでいく。

何で!?

「辰巳っ」

その背を必死に追いかけようとする。

ドンッ——

「…っつ、おい！」

突然、横から歩いてきた男の人に、勢いよくぶつかってしまった。

「すみませんっ！」

すぐに誤って、視線を元に戻すけど、辰巳の背中が、人の波に吞まれて、もう見えない。

「そんな…」

さっきまでの幸せな気持ちは一転。

奈落の底に突き落とされた気分だ。

必死に、辰巳が消えた方へ向かう。

姿が見えなくなったとはいえ、離れてしまった時間は、そう長い。い。

当然のことながら、駅の柱の側に立つ辰巳の背中が、すぐに見つかった。

「辰巳！」

普段より、少し高くなった私の声に反応して、辰巳の肩が、ぴくりと揺れる。

ゆっくりと振り返った辰巳は、はっと、まるで夢から覚めたような顔をしていた。

「…バカ辰巳」

そう言いながら近づく…

その瞬間、私の身体は、固まった。

「誰です？」

可愛らしい声。

栗色の、柔らかそうな髪。

華奢で、思わず守ってあげたくなるような、オシナの口。

「知り合いですか？」

二重の大きな目が、私を捉えた。

——間違いない。

彼女が、写真の女の子だ。

静かな足音は… 1

——私から奪わないで

私だけを見て。

——その人は私のモノ

私だけを愛して。

——お願いだから

ずっと私を…

目を覚ますと、目の前に、見慣れた白い壁が見えた。

ああ、ここは私の部屋…？

壁と向かい合うようにして、寝ていたようだ。

ぼやけた意識の中、目元に手を当てる。

え…、濡れてる？

どうやら私は、泣きながら寝ていたらしい。

原因を探ろうと、考えを巡らす。

けれど、私を包む温かさが、その思考を妨げた。

「……………ん」

「、っ!？」

微かに聞こえた声。

同時にびくりと身体が震えた。

聞こえるはずがなかったその声で、私のぼんやりとした意識は一気に覚醒へと向かう。

それと同時に気づく、お腹に巻き付けられた、温かな重み。

ゆっくり、慎重に、身体ごと振り返ると、そこには、まぶた瞼を閉じて、規則正しい呼吸を繰り返す辰巳がいた。

うつすらと、カーテン越しに当たる日差しを、浴びた顔はとても綺麗で、つい見とれてしまう。

茶色い、柔らかかそうな髪に視線が移る。

気がつくと、どうしても、触りたい、という気持ちを抑えられずに、私は辰巳の髪を、サラサラと梳いていた。

でも…、と考える。

今まで、私が辰巳を家に泊めたことは、片手で数えられる程しかない。

それは、どうしても帰る都合がなくなつた時だけ。

昨日は、何か特別なことでもあつただろうか。

…どうして？

思い出すことができずにいると、辰巳の向こう側にある机の上が、目に入った。

軽く10本はある、空き缶。

もちろん、全てお酒。

そして、私はお酒に弱い。

飲み過ぎたんだ…

昨晚のことを、思い出そうとしても、思い出せない事実と、今になつて気づく、頭の奥に残る、わずかな痛み。

私が、昨晚、飲み過ぎて潰れたために、今、こうして、辰巳が隣にいる。

答えが出ると、自分に呆れた。

以前、一度、お酒に失敗したことがあつた。

それから、お酒には注意していたはずなのに。

大きなため息と共に、隣で眠る辰巳に視線を戻す。

「おはよう」

「…えっ!？」

いつの間にか起きていたのか、寝ていたはずの辰巳は、私をじっと見つめていた。

「お、おはよ」

私がそう言つと、辰巳はめったに見せない笑顔を浮かべて、髪を梳き続けていた私の手に、自分の手を添える。

何かに縛られたように、動けなくなった。

付き合い始めたばかり、というわけでもないのに、辰巳のせいで、私の心臓はいつもより、大きく脈打っている。

「……………」

「……………」

辰巳は、黙ったまま、じっと私を見つめるだけだから、落ち着かない。

きつと、今、私の顔は、赤く染まっている。

頬に熱を集めたまま、どうすることもできないでいる私。

そのことに気がついていいるはずなのに、辰巳は動こうとしない。

この状況に、耐えきれなくなった私は、優しく私を見つめる辰巳を、ほんの少しだけ、睨んだ。

それでも、言葉を発しなかったのは、やっぱり、この甘い、甘い空気を、壊してしまいたくなかったからで。

「ふっ……」

辰巳は、少しだけ笑みを深めて、私に顔を近づけると、そっと唇を重ねた。

触れるだけの軽いキス。

ほんの数秒、重なっただけの唇もまた、とても甘いものだった。

ゆっくりと離れていく唇を、寂しく思う。

名残惜しげに、辰巳を見つめると、優しい顔をして、私の頭をくしやりと撫でると、ベッドをするりと抜け出ていった。

「体調は？」

きつと飲み過ぎたことを、気にしているのだろう。

「ちょっとだけ、頭、痛い」

「……………」

「でも、そこまで痛くない」

「……………」

安心と不安の混ざったような顔を見せた辰巳を、私は、ベッドを下りて、きつく抱きしめる。

この愛しい人が、私のモノだと確かめるように…

「本当に、大丈夫」

「……………」

私の背中に、辰巳の腕が回される。

ぎゅっと、抱きしめられる感覚に、満足していると、

ぐうー

気が緩んだ私のお腹は、盛大に、空腹を知らせた。

「……………」

「……………」

「……………お腹すいた」

恥ずかしさに、俯きながらそう言つと、辰巳は腕を解いて、「わか

った」と言いながら、キッチンへ向かった。

俯いたまま、ちらりとその背中を見ると、その肩が、小刻みに上下して揺れているのが見えて、また、頬が熱くなった。

静かな足音は…2

辰巳が作った朝食を食べて、一息つく。

部屋には、食器を洗う音が響いていた。

「ねえ…」

そう言葉を発する私に、皿を洗っていた辰巳の動きが止まる。

『帰って…』

そう、いつもの私は言う。

当然、辰巳もそう思っているに違いない。

でも……

「…2人で、出掛けたい」

そう言って、辰巳を見つめると、辰巳は、視線を手元に下ろしたまま。

「……………」

「……………」

沈黙が続いたけれど、しばらくすると、辰巳は皿洗いを再開して、「どこに？」と尋ねてきた。

「……山とか」

「……………」

本当は、出掛ける場所なんてどこでも良かった。

2人でいられるのなら、この部屋にずっといてもいい。

でもそうしなかったのは、多分、今朝の甘い空気のせい。

今、私は期待している。

今日は、いつもと違う。

だから、いつもと違う場所で、違うことでも…、呼び出したり、追
い出したりするのではなくて、甘えてみたりする。

そうしたら、甘い2人になるのかもしれない、と。

もしかしたら、やっと私は変われるのかもしれない、と。

「…そろそろ、紅葉の時期だし」

「……………わかった」

そう言った辰巳の声は、いつもより少し、優しく聞こえた。

よかった。やっぱり、この選択は間違っていない。

今日から変わるんだ。

新たな決意に満足して、腰を上げると、辰巳のもとへ向かう。

「座つてろ」と言う辰巳を退けて、洗った皿を布巾で拭く。

私が笑いかけると、辰巳は少し驚いたような顔をした後、すぐに柔らかな表情になった。

嬉しい…

「ふふ、……っ!？」

——ズキン

ほんの一瞬、頭の奥に痛みが響いた。

「……？」

不思議そうに私を見つめる辰巳。

「何でもない」と私が言うと、止めていた作業を再開する。

飲み過ぎたせいかな？

まるで、何かを知らせるように鳴った痛み。

今は、全く痛くない。

気にすることではないと、私は何事もなかったかのように、皿を拭

き続けた。

2人で片付けた食器は、いつもより早く片付いて、なんだかそれも嬉しかった。

話し合いの結果、ここから一時間ぐらいの場所にある山に行くことになった。

麓から山頂付近までは、ケーブルカーで繋がれているため、特に何かを準備する必要もないらしい。

簡単に、身支度をすませると、2人で駅へと向かう。

——ズキン

「……………」

駅に向かう途中、また痛みが響いた。

それは警鐘のように、駅に近づくにつれて痛みを増す。

途中で、薬でも買って飲もう。

ついてない、なんて考えているうちに、駅に到着した。

「辰巳。私、薬を——」

「あつ、辰巳さん!!」

——ズキン

「っ!？」

背後から、聞き覚えのある声。

本当に…、どうして私は忘れていたのか。

「こんにちは」

振り返って、彼女を見る。

昨日と変わらず、可愛い。

そう、昨日と同じ…

『…私、行くから』

昨日、私はそう言って、辰巳と彼女をその場に残して去った。

彼女と辰巳、2人でいるときの空気は、私の入れるものじゃなくて。

私の知らない辰巳がいる。

それが嫌だった。

きっと、辰巳ならすぐに追ってきてくれる。

そんなことを期待していたのに。

ゆっくりと歩いた道も。

お酒を買い込んだスーパーも。

ひとり、部屋の鍵を開ける時も。

結局、辰巳は追ってきてはくれなくて。

部屋でひとり、缶を空け続けたことまでは覚えている。

なんで…、なんで忘れることができたのか。
それとも、忘れようとしていたのか。

「あ…ごめんなさい。デート、でしたよね？」

少し落胆したような声。

気付けば、2人の手は離れていた。

取られちゃう…

私の辰巳を、この子に。

「……………っ」

イヤだ！！

何故かは、わからない。

ただ、この場から逃げ出したくなって。

改札へと、駆け込んでいた。

「優奈っ！！」

後ろから、私を呼ぶ辰巳の声がする。

でも私は振り返らない。

ホームで、タイミング良く開かれていたドアに乗り込む。

プシューと音を立てて閉まるドアから、ホームを見るけれど、やっぱりそこには、辰巳の姿はなかった。

「は、ハハッ——」

乾いた、笑い声が口から零れる。

近くに立つ中年の男性が、白い目で見ていたけれど、気にならなかった。

——それから、一時間。

私は、ひとり、辰巳と来るはずだった山にたどり着いた。

「……なんだ。変わってないじゃん」

山のいたる所にある紅葉は、まだまだ、見頃と言つには程遠い。

私は、まだ変われない。

ううん、違う。

まだ色付かないだけで。

いずれ、私たちは、きっと変わっていく。

変化の色を深めて、木の葉のように…、散っていく。

ひとりで感じる風は冷たかった。

今はない温もりを思い出して、私は涙を流す。

やっぱり、変化なんて望むべきではないのだと。

動き出す時… 1

「優奈…」

ゆっくりと開いたドアの先には、険しい顔をした辰巳がいた。

「どうしたの？早く上がってよ」

いつものように、部屋に上がるよう促す。

綺麗に笑ってみせるけど、ずっと左手に握り締めていた携帯は熱く、掌にはうつすらと汗が滲んでいた。

「……………」

「ほら、早くっ」

立ち尽くしたまま動かない辰巳の身体は、私が手を引いただけで、簡単に動いた。

これは、変わってない…

「……………」

「……………」

部屋の奥へと進むと、私たちは、それぞれ定位置に座る。

私がソファアの左側。

辰巳がその右側。

これも、変わってない…

私は、辰巳が来る前から読んでいた雑誌に手を伸ばす。

「あ、……」

「………」

言葉を発しようとする辰巳に、私は顔を向けることもしない。

「………」

それから、辰巳が口を開くことはなかった。

「ゆーなっ、聞いてる？」

「え？」

気がつく、すでに授業は終了していた。

周囲は騒がしく、教室の出入り口は、人が溜まっている。

「……聞いてなかった。ごめん」

私が謝ると、雅美はため息と呆れ顔。

「まったく。最近、ぼんやりが多いよ」

「ごめん」

そう言うと、またため息。

「……………」

「……………」

そのまま黙り込む雅美。

私の様子がおかしいと気づきながらも、その原因を尋ねてこようとはしない。

きつと辰巳と何かあったって、思ってるはずだ。

「あのね、ゆうなはさ、いっつも相談とかしないじゃない?」

「……………」

「だからね、ちょっとはトモダチを頼れえ!!、て言いたいんだよね、あたしは」

…タヨルって、何?

「…今、困ってることあるんでしょ？」

…コマッテル？誰が？

「だから…」

「大丈夫。別に、何もないし…。私はいつも通り」

そう、私と辰巳はいつもと変わらない。

「ホントに？」

「ホント」

本当に、何もあるはずないんだから…

私たちは変わらない。

「そう……」

納得のいってない、けどこれ以上言っても仕方がない。そんな顔をしていた。

「じゃ、バイバイ」

「えっ、ちょっと！」

私は雅美を残し、荷物をまとめて、教室を後にする。

外に出ると、冷たい風が顔に当たって、目を瞑った。

「優奈」

呼ばれた名前に、目をそつと開ける。

目の前には、いつもと変わらない辰巳がいた。

私は、ゆっくりと口の端を上げ、いつもと変わらないように、その腕に私の腕を絡ませる。

「マンションに行こ？」

そう言いながら、駅への道を進む。

「わかつ……」

「ちょっと待って！」

当然のように発せられた返事は、背後からの声に紛れた。

振り返ると、慌てて私を追いかけてきた雅美がいた。

ああ、嫌な予感がする。

「ね、辰巳くん。聞きだいたいことがあるんだけど……」

ヤメテ

「この写真のこと」

ソナナノ、ドウデモイデショ？

「この隣に写ってる子」

コレイジョウ

「誰なの？」

ワタシタチヲ、カエナイデ！！

「……………」

目の前に突きつけられた雅美の携帯には、以前見た、あの女の子と辰巳の写真。

「っ、帰ろ……………」

「その子は……………」

腕を引いても動かない辰巳はそのまま口を開いた。

聞きたくない！！

思わず後ずさる私。

辰巳はそんな私を逃すまいと、腕を掴んだ。

「バイトの…家庭教師の教え子。それ以上でも、それ以下でもない」

「じゃあ、この写真はどいうことなの？」

何も言えずにいる私に代わって、雅美が辰巳を追求する。

「街で偶然会っただけ。この子、体が弱いんだ。それで、ふらついた時に、支えただけ」

たしかに、よくよく見てみると、そんなふうに見えなくもない。

でも…

「やっぱ、そんなことじゃないかと思った」

満足げな顔で私たちを見る雅美。

「いい？ ゆーなはいろいろ溜め込み過ぎるの！ そんなんじゃダメ！
！じゃ、お邪魔はこれくらいにしとくから。後は2人で。じゃね！」

風のように去っていく雅美。

「……………」

「……………」

私はまだ、聞きたいことがあった。

それなのに頭の中はぐちゃぐちゃで、口から出てこない。

「……………行こう」

私は辰巳に引かれるまま、その場を後にした。

動き出す時…2

手を引かれながら向かったのは、私の住むマンション。

促されるように鍵を開ければ、彼は当然のように、私の手を引いて部屋へと入った。

どすん、といつもより近い距離でソファーに並ぶ。

「優奈」

呼ばれるその声が、思った以上に優しく、私はびくりと肩を震わせた。

これじゃ、いつもと違う。

「ねえ、辰巳。もう、かえ…」

「優奈」

遮るように名前を呼ばれると、何故かそれ以上言えなかった。

言えないなら、と今度はだんまりで通す私。

「……………」

「…優奈」

そんな声で何度も、名前を呼ばないでよ…

「優奈……」

はぁ、と溜め息が聞こえた。

ズキリと心が痛い。

「言いたいこと、聞きたいことがあるなら、今のうちだ」

「っ……！」

そんなこと、いっぱいある。

本当に偶然会っただけ？

本当にあの子の具合が悪かったの？

本当にただの教え子？

あの時の2人の雰囲気は何？

何であの時追いかけてくれなかったの？

あの子のこと好き？

私のこと、嫌い……？

考えたらきりが無い。

頭の中でぐるぐると回る考えは、私の口を重く塞ぐ。

「……………」

「……………わかった」

はぁ、と二度目の溜め息。

聞き慣れた台詞が、今は重い。

ふっ、と軽くなるソファー。

振り向くと、辰巳は玄関へと向かっていた。

「今日は、もう帰る」

「待つ……………」

「俺が……………」

立ち止まった、広い背中。

「俺が好きなのは、お前だから」

いつも不安だった。

私は愛されているんだろうか？

以前、私に「好き」だと言った男は、私と他の女を同時に『愛した』。

「愛してる」と言った男は、結局、別の女へと去っていった。

“あの女”^{ひと}も…

言葉なんて、信じない。

愛しているなら…

そう言つて、行動で確かめた。

そう、

私は、たった2つや5つの音なんか信じない。

「好き」や「愛してる」なんて、そんなものでは気持ちを表すことはできない。

それなのに…

「っ…!!」

今、私はそのたった2つの音に狂わされてる。

目が熱い。

心臓が痛い。

ずるい。

ずるい、ずるい、ずるい、ずるい

そんなの……

「私だって……」

辰巳がゆっくりと振り返る。

「そんなの！私だって、好きに決まってるで……んっ！！」

気がつくと、目の前には辰巳の顔があつて、私の唇は彼のそれと重なっていた。

胸は苦しいくらいに、いろいろな感情で溢れている。

目の端で溢れ出した雫が、頬を伝って流れた。

2人の唇がゆっくりと離れる。

潤んだ視界の向こうには、呆れたような、それでいて優しい辰巳の笑顔があつて、私の視界はさらに揺れた。

辰巳は大きな掌で私の頬を包んで、その指でぐいぐいと目尻を拭く。

「……ばか」

「は？」

「うそ、……ばか」

「ふ、なんだそれ」

そう言った辰巳の笑顔は、いつもと違って。

胸が暖かくなった。

——こうして、少しずつ私たちは変わっていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6115t/>

あなたが好きで...

2012年1月8日22時49分発行